

環境保全を通じて地域の自然を守り、地域の未来を切り開く

北海道浜中町のレジ袋削減の取り組み

はまなかちよう

今年4月から、自治体主導によりレジ袋の有料化を開始した北海道浜中町の取り組みをご紹介します。

豊かな自然とともに生きる浜中町

浜中町は、道東地域の太平洋に面した人口7千人の町。ラムサール条約に登録された霧多布湿原を有し、高級アイスクリームの原料乳や日本一の生産量を誇る天然昆布の産地として知られています。酪農や農業などの一次産業を基幹とする同町では、昭和48年からゴミ回収の有料化を実施するなど、早くから「環境」を意識した地域づくりに力を入れてきました。

レジ袋有料化を「強制」ではなく「要請」

今回のレジ袋有料化は、そもそものは町民の発案によるもの。平成17年に「町環境基本条例」を制定し、その基本計画を策定するため、

町民有志が環境委員会を結成して、全町民が参加できる運動を検討した結果、今回の話が持ち上がってきたといいます。

経済産業省のデータを基に計算すると、町内の年間レジ袋消費量は210万枚（21t）、これらの原料を石油に換算すると40tにも上ることが分かりました。また、観光地でのレジ袋の散乱なども問題となっていたことから、町をあげてレジ袋削減に取り組む必要性が認識されました。そこで、「レジ袋削減推進委員会」を立ち上げ、レジ袋

代の支払いを「強制」ではなく「要請」として小売店の理解を得るとともに、袋代は「1円以上」として、町民の環境意識を啓発する目的で自主的に「寄付」してもらうこととしました。集まったレジ袋代金は、地球環境基金へも寄付いただくことになりました。



(右) 今回のレジ袋削減運動のポスター。中央のキャラクターは、公募により命名された「レジポくん」。
(左) 北海道新聞(平成20年4月8日)ほか、たくさんの新聞に取り上げられました。

霧多布湿原は、浜中町に広がる国内で4番目に大きな湿原です(面積3,168ha)。道立自然公園として親しまれているほか、湿原中央部は「霧多布泥炭形成植物群落」として国の天然記念物や北海道遺産に指定されています。春から秋にかけて様々な花が咲き誇り、特にエゾカンゾウの大群落は日本一と言われています。また、特別天然記念物のタンチョウをはじめ、希少な鳥や野生生物たちが多く生息し、1993年に「ラムサール条約」(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)に登録されました。

バッグ持参が「普通」に

浜中町でレジ袋の有料化がスタートして3ヶ月。今では、来店客の大半がマイバッグを持参し、レジ袋が要る人は1円以上の袋代を募金箱に入れる光景が、「普通」になりつつあります。「レジ袋削減の運動は、省資源や温暖化防止に寄与するだけでなく、浜中町の《環境の町》のイメージ発信と農水産物のブランド力の向上にもつながると期待しています」(町民課・吉家係長)。



店頭に置かれたレジ袋代金箱(地球環境基金募金箱を使用)。

与生が貸与したマイバッグ。500mlサイズのペットボトル3.7本分を使用しています。



一方で、過疎化や高齢化といった課題も抱える浜中町。環境保全を通じた地域活性化策としても、同町のレジ袋有料化の取り組みは注目されています。

有料化に向けた町の後方支援と小売店の協力

浜中町内の小売店の店先には、レジ袋有料化ののぼりとポスターが掲げられ、店内には

「代金はあなたの環境意識」と書かれたレジ袋代金箱と貸し出し用のマイバッグが常備されています。

「この取り組みを多くのの人たちに知っていただくため、PRののぼり、ポスター、案内板を町で作成しました。取り組みの趣旨に賛同していただいた地球環境基金からは、買い物客への貸し出し用のマイバッグとレジ袋代金箱(地球環境基金募金箱)を貸与いただきました。

また、北海道放送と経済産業省からはエコバッグを寄贈してもらいました。当初、小売店の中には「売り上げに影響するのでは?」と心配する声もありましたが、町内のほぼ全店舗のご協力をいただきました」(町民課・吉家係長)。

この取り組みの賛同者を増やし、できるだけ費用をかけずに実施に至ったことも、「浜中町レジ袋有料化方式」の特徴の一つと言えます。



(独)環境再生保全機構は、浜中町(写真左:長谷川町長)より感謝状を贈呈いただきました。

